中高年 仲間の輪広がる

県、地域支え合いに補助金

団塊の世代（1947～49年生まれ）が65歳を迎え始める2012年。日本の高齢化は今後、一段と進む。こうした社会変化を受け、県は11年度、地域での支え合い活動に取り組む民間団体に補助金を交付、孤立防止に向けた対策に本格的に着手した。周囲の支えが必要な高齢者を念頭に置いた事業だが、一方で活動を担う元気な中高年層が連携を深め、自分たちが高齢者となった時に備えるという〝副産物〟も生まれている。

（報道部・本多茜）

高齢者見守りや交流活動 新たなつながり築く

地域の茶の間「寄りなせあいあい」に集う人たち。お年寄りよりも中高年層の利用が多い＝2011年12月、新潟市東区

「突然来たけど大丈夫？」「もちろんよ。」新潟市東区の住宅街に昨年5月、県の補助金を活用して開設された地域の茶の間「寄りなせあいあい」。主婦ら40人のボランティアが交代で常駐し、訪れた人と交流を楽しむ。

「あいあい」の周辺は60年代ごろから新興住宅地として開発され、現在、60代を超えた住民も多い。子ども世代は実家を離れ、別の土地に自宅を構える。同様の光景は県内のほかの地域にも広がる。県内の高齢者だけの世帯数は10年には約15万世帯で全体の17・7％。20年は23・3％にまで増える見込みだ。

■ ■

高齢夫婦での生活は夫婦が元気なうちはほぼ心配ない。しかし、どちらかが倒れたり施設に入所したりすると、残された人が孤立に陥りやすい。

内閣府の11年版高齢社会白書によると、60歳以上を対象に普段人と会話をする頻度を尋ねた調査では、全体の9割が「毎日」と回答。だが、1人暮らしになると男性の41・9％、女性の27・8％が「2～3日に1回以下」

単年事業 継続支援に課題

高齢者を支えることを主眼に置いているが、活動を担う中高年が交流を深めるという、当初は想定しなかった効果も出てきた。

「寄りなせあいあい」では65歳以上の利用はそれほど増えていないが、中高年層中心のボランティアは「友達がたくさん増えた」と親交を深めつつある。運営責任者の中原ハルミさん(62)は「いつかは私たちもお年寄りになる。地域の仲間をつくり、いざという時に頼り合えるようにしたい」と話す。

今後、期待されるのが団塊の世代の活動への参加だ。特に男性は高度経済成長を引っ張った実績がある。地域との関わりが希薄だった人が多いことがネックとの指摘はあるものの「時代を切り開いてきた世代が、新たな地域像をつくってくれるのではないか」（小林課長）との見方が広がる。

サークル活動で「あいあい」を訪れた大越秀悦さん(65)はこう話した。

「自分もそうだが、一線で働いてきた男性は地域に出るのが苦手。でも、いずれ行動範囲は狭まるだろう。充実して生きるには地域での交流は欠かせないと思う」

旬のニュースや地域の課題、身近な出来事を記者の視点で掘り下げる「NEWS EYE」のコーナーへ、情報やご意見をお寄せください。〒950－1189 新潟日報社報道部「企画報道班」まで。ファクスは025（378）9540。メールはeye@niigata-nippo.co.jp です。

男性参加は 工夫が必要

飲み会形式で開かれた「よろんごの木」の会合。参加者の多くは女性だった＝2011年12月、柏崎市比角

代表の吉田建夫さん(65)は「中高年」とした理由について「子育て世代でも高齢者でもない中高年は、案外地域の居場所がない」と説明。特に退職した男性については「社会経験を地域で生かし、生きがいにしてほしい」と期待する。

まずは気軽に顔を出してもらおうと、昨年12月下旬には活動拠点で夕食と飲み会を兼ねた会合を開いた。9人の参加者のうち、男性は吉田さんを含めもともと地域活動に関心の深い3人だった。

地域活動に参加する男性はまだ少数派だが、参加した桑原源一さん(63)は「最初の一歩を踏み出すのに勇気がいるのは分かる。でも、一度顔を出せば男手は頼りにされるし、楽しいですよ」と話した。

県が進めているのは「地域支え合い体制づくり事業」。これまでに59件を採択し、2011年度内にさらに40件程度が補助金の交付対象となる見通しだ。

内訳は地域の茶の間といった「拠点づくり」が23件、除雪やごみ出しを手伝う「生活支援」が9件、高齢者に声掛けする「見守り活動」が8件などとなっている。

活動に携わる人を「主に中高年」とあえて特定している団体もある。柏崎市比角地区の住民有志のグループ「よろんごの木」では、中高年が有償で高齢者の除雪支援などに当たる。

地域での支え合いの意義について、新潟医療福祉大学の豊田保教授（地域福祉論）に聞いた。

新潟医療福祉大 豊田保教授に聞く

絆づくり元気なうちに

地域の絆、人と人の信頼関係が豊かであればあるほど住民の健康が保たれ、生活の質が高まる、という研究結果は学会などでも示されている。

地域づくりは強力なキーパーソンがいるとまく回る。今後、団塊の世代が積極的に関わったら大きな力になるだろう。

この世代は個人主義が基本的なスタンスだが、充実した生き方を探究するエネルギーもある。

夫婦2人暮らしの場合、いずれ高齢者が高齢者の面倒を見る「老老介護」になる可能性がある。介護や看護は専門家に任せるとして、家にこもりがちな人を近所の人が訪ねれば精神的な安心感につながる。そんな気軽な人間関係は元気なうちにこそ築いておきたい。

県が地域社会の再構築を補助金で後方支援するのは非常によいアイデアだ。しかし、1年限りの事業というのは残念。取り組みが定着するよう継続的に展開してほしい。

取材メモ

団塊世代の力生かして

これから65歳以上の「高齢者」になる団塊の世代は核家族化を進めてきた人たち。自らも子どもをあてにしない傾向があるようだ。取材中、この世代の人たちが口にした「遠い親せきより近くの他人」との言葉。子ども世代としては頼もしくもあり寂しくもある。

団塊の世代は社会のリード役を果たしてきた。「地域活動への参加はおっくうだ」という現代の風潮を、「地域で支え合う」というかつての日本の姿に戻せるのもまた、この世代なのかもしれない。